

### 第三章 迷える少年少女は繋がる心を好む

中庭の方が落ち着くと言われたので、日影で涼しみながら昼食を食べていた。  
それが終わると、本題に……。

「昨日の本ありがとう」

「もう返すの？ そんなすぐじゃなくても……。もう少し使いたいでしょ？」  
「つか……！？」

「もしかしてダメだった？ とってもいい話だと思ったのに……」  
嘘を付いては、実用的な作品を目指して書いた作家先生に失礼だ。小さな声ながらも肯定する。

「それは……うん。使えた」

「ほんと！ どこが？ どこが気に入った？」

珍しく、周りには誰もいない。こういう話題になっても、目立つことはないはずだ。  
「睡眠薬飲まされて、起きたら手足拘束されてたところ……」

下を向いて、ぼそぼそと答える。

「そこは私も好きよ。初めてのエッチシーンで、拘束されていて逃げられない。素直に妹の愛情を受けるしかないっていうところよね。兄弟だからと愛を拒む様子、嫌がっていても体が反応を示す瞬間、拘束具がギシギシ音を立てる描写、そういうところにすごく興奮して……」

僕と違い、恋愛小説の感想のように、すらすらと具体的な内容を口にしてている。

「そういうの……恥ずかしいの？」

「ええ。だいたい、そういうことを考えなかったり隠してる方が、不健全だと思うのよ。料理が充実してるみたいに、性を題材にしたコンテンツがたくさんあって当然でしょ。欲求の一つで、私たちの原点なんだから。り、リアルのには慣れてないけど……」

「そんな考えもあるんだ」

淫らなことは不健全と豪語している人の方が歪んでいる。そういうことを言いたいのかな。

ただ、後半部分を聴き取れなかったのが心残り。聞き返して不快にさせたくないし、ここは会話を広げていこう。

「咲ノ宮さんは、ふつうのラノベは読まないの？　僕はよく読んでるんだけど」

「んっと、参考にしようといういろいろ読んだんだけど、どうしても合わないところがあった……」

嫌いとか面白くないではなく、合わないと表現するところに好感を持てる。

価値観はそれぞれで、生きていくうえで拒絶反応を起こしてしまうものは必ずある。僕の場合は、スポーツ業界の話や芸能ニュース、リア充が好きそうなテレビ番組だ。成年漫画などのコンテンツを毛嫌いしている大人が、とても多いのも知っている。それはもう、親のかたきのような扱いをしているのだ。

排除しようとしたり憎んだりせず、咲ノ宮さんのように遠ざけるのが一番に違いな  
い。

でも、どうして合わないんだろう？ この年でサブカルチャーに興味津々だと、ライトノベルを嗜んでいると思っていただけどなあ。萌えとエロが融合している貴重  
な小説だし。

「最近のは、その……そういうシーンがよくあったりするし、期待してもいいんじゃないかな」

「なんていえないのかしら。胸を揉んだりパンツが見えたり、お風呂に一緒に入っ

たりするでしょ。そういうのが起こり続けても、慌てるだけで終わりなのよ。なんでそこで我慢できるの。枯れてるのかなって。何かハプニングがあってもいいはずなのに……。仕方ないとわかってるんだけど、どうにもねえ……。

あと、恋愛の行きつく先は、セックスでしょ。なのに告白で終わりって、ちょっと味気ないじゃない。最後までしてくれたら、本当に愛してるんだなってなるけど。

ほかにも、ヒロインを選べなかったり、好意に気付かない主人公もいるでしょ。決死の告白にしても、聞き取れなかったみたいな展開とか。そういうところがちょっと苦手で……。それに、ヒロインもヒロインなのよ。出会ってすぐ好きになる人ばかりで、もうちょっと過程を書いてほしいなって。エロ漫画みたいな短い話だと、そういうところは端折るべきだけど、長い小説なんだからね。

それで、面白い作品があれば、教えてくれない？ 私が知らないだけで、すごいものがあるかもしれないし。いえ、絶対あるはずよ」

つつい聴き入ってしまう。なぜそれが合わないのか、しっかりと考察している。理想としているラノベを探してあげたい。数えきれないほど多くのジャンルがあつて、それぞれに強い作風がある。きっと、咲ノ宮さんのイメージを良い意味で裏切る

ものがあるはずだ。

ただ、驚いたことが一つ。ライフイベントとして考えているからなのか、セックスという単語がすらっと出てきていた。

さきほどの言葉に従うならば、恋愛の到達点は性行為。一時の性衝動や肉欲なんかではなく、恋人を愛して子を宿すために生殖をする。

咲ノ宮さんとセックスする日が来るのだろうか――

突然胸が締め付けられるように痛み、体の芯から熱くなってくる。昨日と同じ苦しさを。

「大丈夫？　なんだか辛そうだけど？」

「あ！？　ああ、えっと……僕たちもいつかそういうことするのかって……」

いくらなんでも酷すぎる。歯切れが悪かったが、事前の会話から何が言いたかったのか余裕でわかってしまう。

「ごめん！　今のなし！　忘れて！」

「……忘れない。そのね……私もちよっと気になってたんだ」

「……………!？」

「だから、その……………し、してもいい…………」

普段とまったく違う様子で、顔を真っ赤に染め、声まで震わせていた。

その声は、風の音でかき消えそうなほど小さくて…………それでも、はっきりと耳まで届いた。

言葉の意味を噛みしめると同時に、感じたことがないほど強い興奮に襲われる。心臓がおかしくなるぐらい、バクバクとした鼓動を奏でる。一瞬にして頭に血が上り、心も体も平常ではいられなくなる。

目の前にいる女性を、とても恋しく思う。その花唇は、並外れた妖艶さを持っている。煌びやか黒髪に見惚れてしまい。丸まった背中を包んであげたい衝動に駆られ。彼女自身に触れて、女の子の温かさを味わいたくてたまらなくなる。

全身が熱病に冒されたように熱くなり、思考能力を一気に奪われ、もう咲ノ宮さんのことしか考えられない。それでも考えたらいけない気がして、わけがわからない状態にまで追い込まれる。

「……次の授業の予習やってなかった！ 先帰る！」

「ちょ、ちょっと！ いきなりそんな……待ってよ」

その結果、ふざけた理由から逃げてしまった。そう、二人でいることに耐えられなくなり、この場から逃げ出したのだ。

引き留める声が聞こえても、決して振り返らない。

悲しさを帯びた予鈴が鳴り響いている中、一人になれる場所を目指して走る。

別に嫌いになったわけではない。それでも、彼女の傍にはいられなかった。

「今日も一緒に……」

「ごめん……また今度」

放課後になってもこの調子は続いていて、日常の一つにもなりつつあった咲ノ宮さんとの下校を断ってしまう。

本心では、下校時の会話を通して、もっと親しくなりたいと思っている。それなのに、二人きりになりたくない。

感情面も精神面も侵され、苦しいと脳が叫びまわっている。

教室を出るときに、咲ノ宮さんを一瞥する。人生に絶望したような表情だった。間違はなく僕のせいだ。悔やんでも、もうどうすることもできない。

季節が巡るように、僕たちの関係も変わり始めているのかもしれない。

帰ってきてから今現在、ツブヤイターを使うことができずにいる。サキユの宮さんの眩きを見てしまうと、さらにおかしくなってしまうそう。

母が手間暇かけて作った夕食も、色が抜けた料理みたいで、味も何もなかった。

言葉にできないものが、胸の奥に住み着いている感じで、脳内が咲ノ宮さん一色になっている。

昨日はあれだけ頑張った、彼女からいただいた仕事にも熱が入らない。

頭から一人の女性が離れてくれず、眠ることさえできない。

もうどうしたら……誰かに聞いてもらうしかないのかな。覚悟を決めツブヤイターを開き、ダイレクトメッセージで連絡を取る。



『細川さん、夜遅くにすみません。突然ですが、男女間の友情って存在しますか。それとも下心だけですか』

『あると思っているが、いつの間にか恋愛感情に変わっているものだろう。ずっとぼっちだったけど』

こんな時間にいきなり人生相談をしても、丁寧 answered くれた。失礼だが、満足な結果にはならず、続けて質問する。

『それっていつですか』

『さあな。好きな子でオナニーでもしてみたらどうだ。終わってもまだ気になるなら好き。冷めればそれだけの関係。みたいな考え方もあるんじゃないか』

『わかりました。ありがとうございます』

『これでも教師だ。相談にはいつでも乗る』

『ありがとうございます』

『それじゃあ次は、サキュバスと人間は一緒に生活できるかについての会議。小生はできると信じてるが、いきなりサキュバス本能が目覚めて枯れるギリギリまで搾られる日が来るはずなり。今度は七草氏の意見を……と言いたいところだが、今はその子

のことだけを考えておけ。好きな人は大切にしろよ』

やはり、今抱えているものは恋心だろうか。それを確かめるには、恋人をネタにした自慰行為が有効らしい。

性欲の発散が終わっても、まだ咲ノ宮さんを求め続けていたら……。

複雑な感情のまま、彼女を想い始める。

「はあ……」

お昼休み、急にどこかに行っちゃって、下校も断られた。あれから一度も呟いていないみたいだし。

彼の顔を見たい。声を聴きたい。もっと一緒に過ごしたい。満たしてくれていたものが、ぽっかりと欠けてしまった気分だ。

いつものスイッチを入れられず、創作意欲もまったく湧かない。彼は、しっかりと書いてくれているのかな。私みたいに止まっていたら……。

「どうしたらいいの？」

心の中を支配している気持ちが、どんなものかなんともなく理解できる。経験したことはないけれど、今感じているのが恋——異性を好きになるということだろう。ただ、どう伝えればいいのか、それがわからない。

「……教えて」

本棚の漫画に手を伸ばす。それは、欲望の赴くままに男女が愛し合う物語だ。激しい行為から、どれだけ想いあっているのが感じられる。

私は一体何を望んでいるのか。彼とどうしたいのか。脳内に刻まれている単語が、胸に突き刺さる。

その言葉を反芻していると、体が熱を持ち、自然と息が荒くなってしまう。それはまるで、夜な夜な一人で愉しんでいるときのようで。

「教えて……母さん」

「何を教えてほしいって？ 風呂だったらもう沸いてるぞ？」

「ひゃああああ！ ノックぐらいしてって、いつも言ってるでしょ！」  
ガチャリと戸を開けた母が、少し散らかった部屋に入ってくる。

普段ならば、足音や気配で気付くはずなのに……慣れない感情にやられていたせいだ。

「いやあ、ごめんごめん。うん？　なんか顔赤いけどどした？　うおッ、懐かしいなそれ。ああ、邪魔だったか？」

「違う！　違うから！　そうじゃなくて……」

エロ漫画を読んでいたら、エッチなことをしている最中だと受け取られても仕方がない。そうじゃない……とは断言できそうにない。性欲を抑えられなかったのは本当だ。ヒロインに自己投影して、夢想に耽っていた。

「ほほう……さては、溜瀬も好きな人とそういうことしたいんだな？」

「そ！　そうじゃ……ああ……」

「そんな反応されちゃあねえ……」

ここで動揺しては、肯定したも同然。彼をハメたときと同じじゃないか。それに、相手は私を何十年も見守ってくれた親。隠しごとを貫き通せるはずがない。

「どんな人かまでは聞かないさ。彼氏が出来たってだけで、あたしは嬉しいよ。けどなあ、最後まで添い遂げる気はある？」

最後——それは愛し合いながらの性行為。彼とならしてみたい。

「ある……恥ずかしいけど、してみたい……」

「もしかして、何か勘違いしてないか？」

「その……セ、セックスできるかどうかでことですよ」

「やっぱりそう思ってたのか。そうじゃなくてだなあ……」

「そんな！？ セックスが恋愛の到達地点って、エロ漫画から学んだのに。」

「恋愛映画だと、告白の後キスでエンディング。エロ漫画だと、セックスで終わり。でもなあ、現実はずっと先があるんだよ」

「結婚……？」

エロ漫画で結婚描写はあまり描かれていないし、そのことをすっかり忘れていた。

「いいや、それも違う」

「じゃあ妊娠？」

『こんなに出されたら赤ちゃんできちゃう』とか『あなたがパパになるんですわ』み

たいなセリフも少なからずある。

「もうちょっとだ」

「もしかして——！」

将来を誓った二人が、一つ屋根の下に住み、性行為を通して生まれた子を養っていくこと。つまり。

「……子育て」

「ん、そういうこと」

考えが浅かった。セックスして終わりなんて、体目当てもいいところじゃないか。本当に好きならば、ずっと一緒にいるに決まっている。

「あたしは、最後の最後で失敗して……いや、あたしは覚悟決めてただけど、あいつと上手いかなかったんだよなあ……」

その言い方からして、父のせいってことなのかな。

「どうしてダメだったの？」

軽く唸りながら髪をかいて、質問に答えようか悩んでいる様子だった。

しばらく経った後——重くなった口を開いてくれた。禁断の話をする決意したよ

うだ。

「……そろそろいいか。瑠瀬、あたしがエロ漫画描いてるのは知ってるよな？」

「当たり前でしょ。でも、それと何の関係が？」

私の母は、商業でも活動している有名な作家先生で、エロゲの原画を担当したこともあるぐらいだ。

今までずっと育ててくれて感謝していると共に、創作の目標にもしている。

「エロ漫画家になって、二年ほどしたときだったかな、あいつと出会ったのは。まあ、それからいろいろあって……長くなるからカットな。結婚して同居したとこまで飛ぶぞ」

「そこからが上手いかなかったの？」

自分の過去に繋がる話。当然のごとく、前のめりになって聴く。

「あたしがエロ漫画描いてるがバレちゃってな……。別に隠すつもりはなかったんだけどさあ。そんなときに、『こんな気持ち悪いことしてるなんて知らなかった。好きになったのが間違い。こんなのクズがやることだろ。そんな子どもなんていらないし、どうせ子どもも気持ち悪くなる』みたいなこと言われてな。あたしに幻滅して、どこかに

行ったってわけ。お腹の中の瑠瀬を置いてな……」

「……………気持ち悪い……………クズがすることって……………」

エロ漫画を描くことに誇りを持っていて、子育てもおろそかにしていなかったのに、クズ呼ばわりするなんて。

どれだけ育児が大変でも、学校行事で忙しくなっても、しっかりと面倒を見てくれた。加えて、嫌み一つ口にせず、悩みを聞いてくれた。朝まで徹夜して、それからお弁当を作って、学校まで送ってくれたこともあるらしい。

仕事にはいつも全力で取り組んでいて、単行本が出版されたときや評価してもらったときは、すごく嬉しそうにしていた。酷評され悲しんでいるときは、元氣付けあげたこともある。当然、締め切りは絶対に破らない。

大好きで尊敬している母。だからこそ、馬鹿にした人が憎たらしいし許せない。それがたとえ、血縁者だとしても。

「でもなあ、瑠瀬も初めはそんなだったろ」

「あれは……………だって……………」

私が性に目覚めた時期に、母がエロ漫画家であることを告げられた。正直気持ち悪



く感じていた。もちろん、今はそんなこと思っていない。思うわけがない。

「あんとき瑠瀬にあたしの仕事を教えたのは、前と同じになりたくなかったからなんだ。黙ったまま生きるよりも、しっかり伝えた方がいいだろ。予想通り冷たい態度取られちゃって、悩んだんだけど……わかってくれてよかったよ」

懊悩した結果なのか、自分の作品一つ一つについてじっくりと語ってくれた。

描いていて楽しかったことや困ったこと、やり終えてどのように成長したのか、読者の感想を聞かせてくれたり……。そして、この仕事を始めようとした動機まで。

そのおかげで、なんとか受け入れられ、その仕事自体にも興味が湧いた。それが、サキュの宮として活動の原点でもある。

「で、何が言いたかったんだっけ？ ああ、趣味を理解してくれる男にしろってことだ。あと、付き合うんだったら、同人活動のことはしっかり話しておけよ。それで嫌われたら、それぐらいの奴だったってだけさ」

「サークルのことは、もう教えてるから大丈夫。彼もそういう人でね。初芽七草さんっていうペンネームで小説を投稿してて……」

「ほお、それは……後で調べてみるとするか。それで、恋愛的な意味で好きなのか？」

「……う、うん。でも、急に話してくれなくなって……一緒に帰ってもくれないし……嫌われちゃったのかな？ 友達だったのに」

明らかに避けられている気がしてならなかった。下校を断られたときの悲しさが、今でも忘れられずにいる。

個人情報尊重せずに、身バレするようにし向けたし。コミフェのために、執筆をお願いしちゃったし。嫌われる要素がいくつも浮かんでくる。

「ああ……つとね、たぶんだけど、恥ずかしいんじゃないか？ 恋愛対象として見始めるときは、誰だってそうなるもんだ。あたしだってそうだったし、瑠瀬を嫌ってわけじゃないって。だからさ、そんな顔するな」

「そう……なの」

「たぶんな。この年頃は大体そういうもんさ」

恋人と意識してしまうから距離を取っている。そう考えることで、暗い世界から脱出できた。

もしそういう理由で避けているのなら、私に好意を抱いていることになって……。一人の女性として見てくれているということ……。。

「だからな、時期が来たら、また二人でいれるようになるからさ。今度は彼氏として」  
「それっていつ？」

広がった距離を早く戻したい。一緒に下校して、お昼ご飯を食べて、たくさん話したい。

「さあな。いつかなんてもんはわからんよ。でもなあ、瑠瀬が告ればいいんじゃないのか？ そしたら、そいつも決心が付くだろう？」

「わたしが！？」

「男がしないといけないって決まりもないし、いつかはするもんだろ。好きかどうかでお互い悩み続けるよりも、返事を聞く方がよっぽど楽だと思うぞ」

「……けど、どんな感じにすればいいの？」

ただ一言好きと口にするだけでも、相当な勇氣が必要になってくる。

そして——告白後の空気がどうなるのか。もし振られでもしたら、関係はより悪化しそうだし、両想いならばエロ漫画のような展開にもなるかもしれない。

そんなことを考えて、恋愛経験のないか弱い心が押しつぶされそうになる。

「他人事になるかもしれんけど、想ってること言えればいいだけだろ。そいつのことまっ

たく知らないし、瑠瀬とどう過ごしてきたのかもわからないだからさ」

彼と過ごしている内に生まれた感情。それを素直に伝えればいいだけ――

「うん……わかった」

「もう終わりか？ だったら、ぬるくなる前に風呂入っとけよ。あたしは原稿あるから戻るけど、何かあったら呼んでもいいぞ」

感謝しながら、部屋から出ていく様子を眺めていると……またすぐに入ってきた。

「そうそう、瑠瀬がそういうことするのは賛成だし、いつかはしてほしいと思ってた。でもなあ、する時期を間違えるなよ。あと、受かったって喜んでた学校に行かないって選択も必要になってくるだろうから。その辺は自分でもわかってるだろうけど……」

「……うん」

理解していることを言われると、少しばかり鬱陶しくなるが、それだけ心配してくれているということだ。苛立ちを覚えるわけがない。

「でも、同人は続けたい！」

新たな私を見つけ出せた同人活動だけは、絶対にやめたくない。

「やめろなんて言っていないだろ。したいことをしたいようにする、それが同人っても

んさ」

「……ん。そうだったね」

ガチャリと戸が閉められた後で、彼についてひとり想う。

初芽七草の名で小説を投稿している。聞き上手だけど、進んで話しかけてはこない。嫌な顔一つせず、学級通信の下書きを手伝ってくれた。それから……あれ？ 全然知らないような。

それでも、考えているだけで、体の芯から徐々に熱くなってきて……。

この想いを正直に伝えて、彼の気持ちを確かめなければ。

咲ノ宮さんに会いたいけれど、この感情が暴れ狂いそうで怖い。  
登校するか欠席するかで迷っている。

葛藤を続けていると、すでにお昼を回っていた。昨日の僕の様子から、そっとしてくれていたようだ。

午後の授業だけだし、もう休んでもいいかな。いや、こんなんじゃない。いつまでもウジウジしているわけにはいかない。

逃げているだけでは、絶対に立ち直れない。ずっと苦しいままだ。だったら……布団から身を出し、準備を整える。

気分が重くなっても、途中で胸が詰まっても、学校を目指して足を動かす。

下駄箱を見ると、あのときとまったく同じ手紙が入っていた。偽名でもペンネームでもなく、本名で書かれていた——咲ノ宮瑠瀬と。

その名を目にした刹那、容姿が、声が、一緒に過ごした日々が、鮮明によりがえってくる。

一呼吸置いてから、本文を読んでいく。

『放課後、教室で待っていて。どうしても伝えたいことがあるの』

どうしても……一体何なんだろう。僕に嫌気がさし、絶交を申し出るのか。もしくは……悪い結果しか想像できない。

それでも、受け取ったからには、話を聞かなければならない。ここで逃げたら、本当の意気地なしになってしまう。

勝負は放課後だ。

ついに、そのときがやってきた――

外から差し込む夕日で、二人しかいない室内は紅く染まり始めている。それはまるで、咲ノ宮さんと友達になったあの日のようだった。シチュエーションは同じでも、僕たちの関係は大きく異なっている。

どうしても伝えたいことって？ やっぱり避けていたことを謝るべき？ それとも、今の気持ちを正直に言うべきなのか？

頭の中に浮かんだたくさんさんの疑問と迷いが、消えることなく膨張し続ける。

そんなときだった――

「手紙読んでくれた？」

「は、はひ！」

席を立ち、声がした方向に体を向ける。

誰よりも欲していたその姿に、胸が焼けそうなほど熱くなる。

おどおどした僕の瞳と違って、決心めたものが見えた。だからこそ、緊張や不安、恐怖、言葉にできないほど多くの感情に襲われ、おかしい返事になってしまったことが悔やまれる。

「もっと気を抜いて」

落ち着きのない僕を宥めるように、いつもの声色で話しかけてくれる。久々に耳にした声は、決壊寸前の状態を鎮めるのに十分だった。

「……わかった」

「それで……どうしても伝えたいことがあって、聞いてくれる？」

無言で頷く。

静謐な教室に、スゥと女の子らしい呼吸音が響き……。



「友達をやめたいの！」

目の前が真っ暗になる。

圧倒的な辛さに心が潰れ、視界がにじむ。

咲ノ宮さんとの思い出が黒く塗りつぶされていく。

「嫌だ！ もっと咲ノ宮さんと一緒にいたい！ 避けていたのは、嫌いになったわけじゃなくて……その……隣にいたら頭がおかしくなりそうで……どうしようもなく恥ずかしくて……上手く言えないんだけど、とにかく嫌いじゃなくて……むしろ、その……す、好きで……別れるなんて嫌だ！」

「え！？ あ……そ、そうじゃなくて……」

感情に流されるまま口にした告白に、わたわたと慌てている。

しかし、数秒も経つと、真剣なまなざしに戻り……ゆっくりと唇が動き始める。

「好き！ あなたのことが好きなの！ これからは友達をやめて、恋人としてやっていきたい！ でも、あなたのことは小説を書いていることと、好きな作品やシチュエーションぐらいしか知らなくて……。ずっとずっと一緒にいて、あなたのことをたくさ

ん知りたいの。私と……私とつきあってください！」

語気を強めながら、一字一句丁寧に伝えられる。

その言葉一つ一つが、心の奥の奥まで強烈に浸透する。

友達をやめる。それは絶交ではなく、恋人になるという意味だったんだ。

咲ノ宮さんは覚悟を決めた。そうなれば、僕も決心するしかない。

言葉に内在されている靈力を吐き出すように、全力で告白に応じる。

「こちらこそ、お願いします！ 咲ノ宮さんのことは、絵を描けることぐらいしか知らなくて……その……一緒に過ごして、好きな食べ物とかどんな服を着てるとか、咲ノ宮さんのことをぜんぶ知りたい！」

「ありがとう……」

「それは僕が言いたかったことなんだ……ありがとう」

「……これからは恋人として一緒にいてね」

「もちろん。咲ノ宮さんもいてくれる？」

「ずっといるわよ。それと、瑠瀬って呼んでほしいんだけど。私たち恋人同士でしょ」

「る、瑠瀬……」

名前で呼んだのは彼女が初めてだ。それはそれは、ものすごく緊張した。友達になった場所で友達をやめ、僕たちは恋人になった。

そして、数秒……数十秒……目と目があつたまま、時間が過ぎていく。教室内の空気はすっかり桃色に染まっている。

この後、エッチなコンテンツでよくある展開に移っていくのかな。夢にまで見たあの行為ができるんだろうか。

「あの……ね。するのはもうちょっと待ってほしいの。それと、キ……キスも我慢できなくなっちゃいそうだから……うう……」

普段よりも可愛げのある声で、俯きながら告げてくる。

落胆を隠せない。確かに、告白してすぐにするのは現実っぽくないとはいえ、限界まで滾った気持ちをどこにやればいいんだ。

少しでもいいから、肉体的に接触したい。そう思うのは、男のわがままなのか。けれども、溜瀬も我慢しているのは明白だ。

この想いは、来たるべき日まで封印しておこう。

「だから……」

恥ずかしそうに手を差し伸べてくれる。

「手をつないでほしくて……やったことなかったでしょ」

何の迷いもなく、宝石のように綺麗な手を握る。

初めて触れた女の子の手は、僕より何倍も柔らかく、握っているだけで心が満たされる。

「ありがとう……」

とびっきりの笑顔を見せてくれている最愛の彼女。

これからは、瑠瀬と素晴らしい日々を過ごしていきたい。

二人での下校。昨日していなかっただけで、随分久々に感じる。

今、隣には愛する人がいる。それだけで、天に昇るぐらい幸せだった。

「ねぇ？」

「どうしたの？」

「その……電話番号の交換しない？」

そういえば、まだしていなかったな。一番知られたくなかった、ツブヤイターのアカウントはバレているというのに。

もちろんするに決まっている。なんとかのアプリのID交換だったら、インストールしていいいせいで断るしかなかったけど。というか、僕と同じ立場の瑠瀬のことだ。そういうアプリは入れていないんじゃないかな。

「ちょっと待って、確認するから。えーと、どうやってみれば……ああ、これだこれ」電話帳を開くの到手間取ってしまう。それもそのはず、親の番号を登録したとき以来、まったく使っていなかったのだから。しかも、スマホを買った当日の話だ。

瑠瀬に、電話番号が映った画面を見せる。

慣れているのか判別が付かない微妙な手つきで、その数字を入力し始めている。しばらくすると着信音が流れ――

『私、サキュバス。今、あなたの後ろにいるの』

「は！？ え！？」

驚くのは当然だった。どうして、サキュバスが電話に……。

「うふふっ、何よ、その面白い反応は……。もっと遊びたくなっちゃうじゃない」

笑い声を聞いてすぐ、瑠瀬の悪戯だったと理解する。

おもちゃのような扱いを受け、馬鹿にされてしまう。悔しい。男として情けなさすぎる。けど、感じずにはいられない。

友達になったあの日も、嫌というほど弄ばれていたことを思い出す。手紙に、誘惑、電車内の通知とそれはもうたくさん。

ちよっとしたSとMの関係になっているが、これはお互いを信頼しているからこそ成せる業だ。

俺Sだから殴っても許せよとか、お前Mだから痛めつけられるの好きだろとか何馬鹿なこと言ってるんだ。あと、どっちって話を振られて、答えてすらいらないのに、憂さ晴らしのためにM認定して暴力ふるってんじゃねえぞ。

「もう、ぼうとしてないで、さっきの番号登録して」

トラウマに支配されていたようだが、瑠瀬のおかげでなんとか帰って来られた。

電話番号を登録し終わると、恋人としての距離が縮まった気がした。

「これで二人目。一人目は母さんで、次があなた」

「ふふっ……」

「へえ……ぼっちって嗤うんだ。どうやって後悔させてあげようかしら」

「違う違う。僕も家族しか入れてなくて、同じだなあって……。それに、親の次って知ったら嬉しくなって……」

豹変した瑠瀬を鎮めようと、愛するからこそ生まれる気持ちを必死に伝えていく。

「そうなの。えへへ、一緒だね」

悪魔のような表情から一変、先ほどまでの天使の微笑みに戻る。どちらも最高とはいえ、日常を過ごすときはこちらの方がありがたい。いきなり変わると、すぐく心臓に悪いし。悪魔状態は、桃色の世界だけにしてほしい。

それにしても、度々起こるこの豹変は、演技でやっているのか。それとも、天然なのか。そういうところを知るためにも、これから一緒にいたい。

初めて下校したときは、沈黙状態ばかりだった。だが、今は会話が途絶える気配がまったくくない。

その途中に、新刊——僕が書く小説の話にもなり、進捗具合を尋ねられた。それなりにはできていると返事をしておいた。友達関係が崩れ始めたせいで、全然手を付け

られなかったんだけど。それも今日まで。今夜から再会して、早い内に納品したい。それに続き、他にどんな新刊があるのかと聞き返したが、秘密と可愛らしく口にして、すぐに話題をそらされた。サキユの宮さんのことだ。最高のものができあがるに違いない。

幸せな時間も終わりを迎え、私語厳禁の世界に乗り込んだ――

同じ服を着た人がたくさんいても、隣にはずっと瑠瀬がいてくれた。それはまるで、くっついて離れない磁石のN極とS極のように思えた。

「夜、電話するから。……じゃあね」

降りる寸前、耳元で囁いてくれた。

感謝と喜びを伝えるため、スマイルを送りながら手を振ってあげる。

帰ってからの楽しみが、また一つ増えた。彼女の声を聴くためのスマホをぎゅっと握りしめながら、今日一日で得た最高級の幸福を噛みしめる。

時刻は夜更け。



パソコン横にスマホを置き、執筆作業に勤しんでいる。少し目を開けると、こんなものを書いていたのかと自分自身の文章に驚くと共に、修正点がいくつも見つかり情けなく感じてしまう。

そうこうしている内に、聞き慣れない音楽が流れだした——着信音だ。すぐさま、手元のスマホを取った。

恋人である咲ノ宮瑠瀬の名前が、画面に表示されていた。

本当に彼女なのか。どうやって会話を始めたらいいんだろう。初めてのせいで、躊躇ってしまう。

しかし、それもほんの数秒。勇気を振り絞り、電話に出る。

『もしもし』

『もしもし、さきの……瑠瀬』

『そう呼んでくれた方が嬉しいわ。それで、今どうしてる？』

何をしているのか気になって、電話をかけてみた。そういう意味だと捉えて、頬が緩んでしまう。これが初々しいカップルの行動かと思うと、なおさらだ。

「頼まれたのを書いて……」

『間に合うように完成させてね。期待してるから』

「わかってるって。期限内にできなそうだったらごめんだけど……」

『そのときは、私がなんとかするから安心して。で、なんだか息遣いが荒いようだけど、エッチなの書いて興奮した？』

「は！？　ち、違うって。そんなことないから」

執筆中に生理現象が起こっていたとはいえ、瑠瀬と話している今は落ち着いている。必死に否定していると、くすくすという笑い声が聞こえてきた。もしかして、また遊ばれている？　表情がわからないせいで、もどかしい。

『一つ言っておくわ。あなた自身が使えるものを書きなさい。本人が使えないんだつたら、読者も無理に決まってるでしょ』

正論だった。作り手が満足できなければ、受け手も満足できるはずがない。瑠瀬の教えを胸に書いていこう。

ん？　となると、彼女も作品を世に出すときは、自分の描いたものでエッチなことをしているっていうのか？

「そ、それじゃあ……瑠瀬も描くときは……その……して……」

セクハラと頭ではわかっているのに、性欲旺盛な思春期特有の好奇心には勝てず、口が止まらない。

『……聞きたい？』

圧倒的な言葉の圧力。男を道具としか見ていない、いつものSモードで聞き返された。

鋭い氷柱を刺されたような悪寒が全身に走って、酷く怯えてしまう。

「い、いえ、遠慮しておきます」

『そう、それは残念だわ』

興味が薄れて、飽き飽きしているようだった。どうやら、ヤンデレ気質のような天然ものではなく、性的に最強な女の子様キャラを演じているのだろう。

『それで、ここからが本題なんだけど……』

力のこもった言い方に、つつい身構えてしまう。

『あの……日曜日、で、デートしない？ 一緒に過ごしたいし、あなたのこともっと知りたいし……ダメ、かな？』

デートだと！ カフェに行ったり、カラオケをするあのデートなのか！

「駄目じゃない。というか、してみたい」

『じゃあ十二時前でいい？ 待ち合わせは……学校近くの公園で。わかる？』

「うん、日曜のお昼にあの公園ね」

もう時代遅れなのか、そこで遊んでいる人を見たことがない。かくいう僕も、通り過ぎることはよくあるけれど、入ったことは一度もない。

そこから、時代の流れに取り残されたような、地味で目立たない印象を抱いている。そんな場所を選ぶなんて、瑠瀬らしいといえるかなんというか。

「それと、お昼食べてきちゃダメだから」

「うん、一緒に食べよ」

初電話でデートをすることになった。

週末が今から楽しみすぎる。

でも、少しばかり心配だ。

まず、着られれば何でも良いと思っていた僕にとって、瑠瀬と過ごすのに最適な服を持ちあわせていない。とりあえず、今持っている服で、いい感じのものを探して……英語が書いてあるのは論外だろ。何書いているのかわからないし、おかしい意味の方

が多いだろうし。派手な色よりも、黒にワンポイントぐらいがちょうどいいかな。悩みに悩んだ末、なんとか決め終えた。

もうひとつの不安は、デートプランの構築ができないことだ。カップルが訪れるベきリア充的なスポットなんて、無縁すぎて想像もつかない。こういうときこそ、偉大なるパソコン様のお力を借りればいいのか。デートオススメスポットで検索して、その結果を地元のマップと照らして……。

準備は整った……たぶん。後は、当日を待つだけだ。

おっと、肝心の小説に手を付けていなかった。

土曜日は執筆作業に捧げて、日曜日にデートを満喫するでしょう。